

RadioDays



ラジオデイズ

声には、
人の体温があり物語がある

8

August Edition
2007, vol.3
Free of charge

月刊「ラジオデイズ」8月号（通巻第3号）
2007年8月8日発行
【発行人】赤塚祐一郎
【編集人】大森美知子
【発行所】株式会社ラジオカフェ
東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル 6F
Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281

この人の声が聴きたい ● 8月

半身小説家、 高橋源一郎

『さようなら、ギャングたち』出生の秘密

高橋源一郎さん（作家）



じゃあ、あとの半身は何なんだということになる。詩人、批評家、ポルノ作家、競馬評論家。別になんだっていいのである。人知れぬ阪神タイガースファンであったり（この場合は阪神小説家ね）、革命党の闘士だったり（この場合は侵犯小説家）、あるいは季節労働者であったりした。

しかし、どんな半身に身をやつしてはいても、高橋源一郎の半身は常に小説家だったし、これからも小説家であり続けるだろう。

高橋源一郎が『さようなら、ギャングたち』で一躍文壇的なデビューを飾ったとき、いったいどれだけの読み手が、高橋の意図を理解できたのかと思う。私の身の周りにいた本好きたちも、編集者も、ほとんどがこの作品を誤読し、首をひねって途中で投げ出したのである。（白状すれば筆者もその一人であった。）最初は誰もが、実験的な作品であり、新種のモダニズムだと感じた。

『さようなら、ギャングたち』は、多くの読者によって賞賛され、支持されるような類の作品ではなく、ごく少数の特権的な「目利き」（周知のごとく、それはたとえば瀬戸内寂聴であり吉本隆明であった）によって見出されるような作品であったのである。

作家が、自らの作品に対して、それを評価

し愛着を持ち、いくらかの自信を持つということはある。『さようなら、ギャングたち』などなるとはいいまい。しかし、それが時代を画するような価値を持ちうるものだという「絶対的な確信」を持つなどということは、ほとんどありえないことである。しかし、高橋源一郎は、その処女作（実際にはその前に『ジョンレノン対火星人』がある）において、主観的な愛着と、客観的な批評眼を同時に持つことができる稀有な作家であったのである。

そのことを、筆者は最近の内田樹、高橋源一郎対談で知ることになる。彼はこんなふう
に当時のことを述懐している。
——ぼくは自分の時代と経験を書きたいと思っていた。誰も「それ」を書いてはいなかったから。そして、「それ」を書くことは、義務であり、書けなければ死んでも死にきれないという気持ちであった。『さようなら、ギャングたち』を書いて、これなら許してもらえるだろう、負債を返すことができたと思

った。
真摯な、小説家の言葉だ。私たちは、この作品こそが「時代」を正しく伝える表現の発見であったことを改めて知ったのである。

平川克美（ラジオデイズプロデューサー）

ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、ラジオ番組も制作・放送しています。それが深夜のトーク番組『ラジオの街で逢いましょう』です。

ラジオ関西 毎週火曜日の深夜24時半から午前1時まで。

今後の放送予定（8～9月のゲスト）

- 8月14日 大岡 玲（作家）
- 21日 上田假奈代（詩人）
- 28日 美濃部美津子（志ん生師の長女）
- 9月4日 柳家喜多八（落語家）
- 11日 和田信平（フレンチの料理人）
- 18日 鳥丸せつこ（女優）
- 25日 高橋源一郎（作家）

お相手はラジオデイズのプロデューサーの平川克美、菊地史彦、大森美知子、そして大阪はEBCのスーパーマルチメディアター江弘毅が務めます。これまでの放送分は、ラジオデイズのティザーサイトにて、ストリーミング放送中です。真夜中の語らいに、ぜひ耳を傾けてみてください。 <http://www.radiodays.jp>

9月14日（金）
ラジオデイズWEBブランドオープン！
会員募集スタート！

いよいよ9月14日より、ラジオデイズのオリジナル収録など、話芸・文芸・対話を三本の柱に、声の魅力を凝縮した「コンテンツ販売を開始します。また、それに先発して、今月8月27日（月）よりサイトをオープンし、入会受付を開始します。期間中（8/27～9/26）に入会いただいた会員様には、もちろん先行入会特典です。

<http://www.radiodays.jp>

ラジオデイズの「対話の街」からは、内田樹のダイアログ・シリーズがリリースされます。気鋭の思想家・内田樹氏と、悪ガキ時代の盟友ラジオデイズ・プロデューサー平川克美とともに、錚々たるお相手をお招きして語り尽くします。最初の対話のお相手は、作家の高橋源一郎さん、題して「高橋源一郎 vs 東京ファイティングキッズ」。お次のお相手は、哲学者の藤田清一さん、脳医学者の養老孟司さん、ほか続々。乞うご期待！

●第4回 オリンパスシンクろ寄席

【日時】8月30日(金)午後6時45分開演(午後6時15分開場)
【場所】お江戸日本橋亭(半蔵門線 銀座三越前)

すべての落語は新作として生まれ、生き残ったものが古典になる……、そんな過酷な道に進んで身を捧げる人々がいます。それは新作落語の演者です。時代の流れから生み出された一席の斬を、口演を重ねながら書き換えていく。そんな現代の落語ばかりをコレクションしました。毎回二人の演者が新作落語を二席ずつ競演します！

柳家喬太郎

柳家さん喬に入門。平成五年、二ツ目昇進と同時に「喬太郎」と改名。二年、11人抜きで真打昇進。師匠さん喬譲りの表現力と、たぐい稀な創作力で、古典落語と新作落語、双方を妄幻自在に操る八面六臂の人気者。新作落語でも数多くの名作を残している。



瀧川鯉朝

春風亭柳昇に入門。平成一五年、柳昇死去のため、鯉昇門下に移籍。一八年真打昇進し、「瀧川鯉朝」と改名。新作落語では一大潮流をなす春風亭柳昇一門のなかにあって、ブラックかつマニアクな新作落語の演じ手としても名高いが、実は古典落語も実力派。



明烏い話

連載第4回



本田久作

山岡鉄舟が円朝に昔話の『桃太郎』を聞かせてくれたと言ったという。「お前は噺家であるに話を聞かせる玄人である。私はこの『桃太郎』という話を子どもの頃母親から聞かされた」と面白く話したろうと思った。素人の母ですらあれほど面白く語ったのであるから、噺家のお前であればさぞかしであろう。これには円朝もぎやふんときまり、「御前、私はまだまだ修行が足りませんでした」と頭を下げ、以後鉄舟について禅を学んだという。

この話は円朝にまつわる数あるよい話の内のひとつとして伝えられている。私はこの「よい話」を知った時、呆れ返った間抜け野郎どもだと思った。この話の中では鉄舟が一番間抜けだが、それに追従する円朝も間抜けだし、これを美談と褒めそやす後世の奴らも間抜けである。考えようによっては、円朝はしよせん芸人なのだからお旦那になるかもしれないお偉方に野暮な要求をされたところで、それに逆らうわけにはいかぬ。だからまあ、仕方なしに鉄舟の愚かさに合わせてただけなのだ、私としては好意的に解釈できないでもないが、東京の落語ファン（とりわけ噺家）は円朝がそのような幫間じみたことをするわけがないと頭から思っているのだ、私の好意的解釈はあっさり退けられてしまう。

私を知る限り八代目の正蔵が唯一この鉄舟の要求がいかに馬鹿げたものであることに

気づいていた人だが、その正蔵にしてからが鉄舟の愚かさは半ば認めながらも、円朝はやはり偉いという感想を導き出している。母が子に『桃太郎』を語る時は無私である。無私の気持ちによって語るのだから、子は母の話を聞いて感動する。であれば、円朝は鉄舟についていてその無私の気持ちを学ぼうと思っただろうと、正蔵は言うのであるが私にはそうではないと思っっている。

鉄舟は江戸っ子のはずだが、江戸っ子にだって野暮はいる。鉄舟の兄貴分の勝海舟は粋なのに、鉄舟はいかにも野暮で、こういうのは天分だからどうしようもない。鉄舟がどれぐらい野暮かと言え、この人には真面目なこと以外に取り柄がないほど野暮である。だからたまたま禅にはまるとそれ一筋になり、飯炊きに向かって「料理の中に禅味を盛り」などと野暮なことを言い出す。円朝に『桃太郎』をやってみろ、と言った時もおそらく鉄舟はそう言っている自分の言葉にうっとりしていただろう。その顔が目に浮かぶ。そして、その時すかさず幫間の瞬発力で「御前、これは参りました」ときまじめに言ったであろう円朝の顔もありありと想像できる。この場面で扇子で頭をびしゃびしゃ叩きながら「こいつは一本とられやした」などと言わなかったのが円朝の一流の芸人としての芸である。

円朝は存命中、一部の人間たちから高級幫間とさげすまれた。そのことを否定するために、円朝がどれほど矜持の高い芸人であったかを裏付ける証言がまたある。だが私は心にもない世辞が言えぬ芸人は芸人ではないと思っっている。前述の正蔵の話の中で、その頃の円朝ならば売りに売っていたのだから、その場は適当にごまかして、それ以後鉄舟とつきあわないこともできた、それなのにそうしな

った円朝は偉い、という論法で正蔵は話を進めている。矜持を持った人間なら、相手が鉄舟ほど社会的名声を得た人物であつても、得々として『桃太郎』をやれなどと言った時点でそういう輩を相手にすべきではなかった、と私は思っている。だが、円朝は実際にはそうはしなかったし、それはそれで正しい判断だったとも私は思う。円朝は芸人で、芸人であれば、ここで鉄舟におべっかを使うのが判断としては正しい。円朝はあれほど売れたのだから円朝は偉いと私が言うのと、東京の落語ファンは必ず怒りだすのである。

●ほんた・きゆうさく

一九六〇年大阪府生、ライター。二〇〇二年の「仏の遊び」が国立演芸場台本募集佳作受賞以来、落語、漫才など新台本関係の賞を毎年総ナメの業界注目の新進作家。主な受賞作「玉手箱」(国立演芸場台本募集優秀作)、「僕の葬式」(按察の夢)、「幽霊蕎麦」(いずれも落語協会優秀作)など。

私の読んだばなし 柳家三三

き「文違い」
生れて初めて聴いたのが、この噺。廊も女郎も知らないのに、騙し騙されるおもしろさでテレビに釘付けになった小学一年生……、イヤな子供だねえ。

武『味噌豆』

寄席初体験(昭和六二年八月二〇日・浅草演芸ホール)の、林家とんでん平師匠(当時二ツ目)の高座。短いながら、このネタには噺の楽しさのエッセンスが凝縮されています。

参『山崎屋』

この日(昭和六三年二月二〇日・鈴木演芸場)が決定打。師匠・小三治の演じた、大旦那を騙すくだりとサゲにつづく後日談のコントラストに忘我の境地で入門を決意。……うーん、困った中学二年生だなあ。

第4回 ラジオデイズ落語会

〔日時〕8月10日(金)午後7時開演(午後6時半開場)
〔場所〕ライブカフェ・アゲイン(東急目黒線 武蔵小山)

江戸時代から明治時代に作られ、数多の噺家によって高座にかけられ、時を経て世相に洗われて、そして語りつがれてきたのが古典落語。それを自家薬籠中に演じきる現代の噺家たち！ 人情の機微に触れ、免疫力増進の涙と笑いの宝庫、至福の話芸の真剣勝負。開口一番は、毎回気鋭の二ツ目さんにお願ひします。

五街道雲助

(こみちとうもすけ)

十代目金原亭馬生に入門。昭和四七年、二ツ目昇進と同時に「五街道雲助」と改名。五七年、真打昇進。いまは演じ手の少なくなった圓朝噺、廓噺、怪談噺にも積極的に取り組む実力派の大看板であり、聴衆を惹きこむ独特の語り口にも熱狂的なファンが多い。



柳家三三三

(やなぎや・さんぞ)

十代目柳家小三治に入門。平成一八年、真打昇進。若手の実力派有望株として二ツ目時代から注目され、本年公開の映画『しゃべれどもしゃべれども』では、主演の国分太一にも落語指導を施したことで有名。古典落語に対する真摯な姿勢と解釈力には定評がある。



●お囃子 松本優子

(まもと・ゆうこ)

柳亭こみち

(りょうてい・こみち)



七代目柳亭燕路に入門。前座名「こみち」。平成一八年、二ツ目昇進。小柄ながら凛とした佇まいと、リズム感溢れる口跡は師匠譲り。小唄、都都逸などもこなし、今後の活躍も楽しみな「いなせ」で骨太な芸で、本格派として注目されている。

こみちが行けば

女流二ツ目の修行日乗②



柳亭こみち

「襷(たすき)のねーちゃん」、前座のころ茶屋で、ときおりこう呼ばれた。落語協会の前座で、修行中に女の着物を着ていた者は私が第一号。修行中、師匠宅のトイレ掃除も風呂掃除もすべて着物で行なう。女着物の立ち居振る舞いが身につくように、との燕路方式だ。袖が邪魔なら襷しろ、と。

ところが、女着物で働く前座は見慣れぬうえに、そいつはさらに見慣れぬ襷をしている。私にかけられる言葉はいつも「女中さん」「仲居さん」、襷をはずしても「お囃子さん」。あのー、私前座なんですけど……。師匠は「襷は三秒でかけろ」と。鈴木演芸場では高座返しをするとき、一度下手側にはけ、高座の後ろを走って上手側に控える出番の師匠に「苦勞様です」と頭を下げる。高座返しでは襷をはずすが、すぐに楽屋仕事ができるよう高座の後ろを走るあいだに襷をか

けなさい、女着物に襷でいることに他から文句が出ないようにしなさい、と師匠。

こうして注意をはらっていたある日、茶屋で気づくと襷でめくられた袖の中の襷を凝視されていた。やれ「襷の色は赤に」だの「肌襷も見せてくれ」だのコメント多々。茶屋で見慣れぬ女着物に襷のいでたち、とかくコスプレ感覚で見られがち、というのは、盲点だった……。

●りょうてい・こみち

社会人生活を経て、平成15年柳亭燕路に入門。18年11月二ツ目昇進。趣味はピアノ、ギター、ウクレレ演奏。

味な脇役・話芸の きまり文句

連載第3回

金



松井高志

話芸の世界では、せっせと蓄財に励むような人物は、たいてい悪口を言われるし、ストーリーの上でも碌な目に遭わない。浅ましい蓄財の具体例として、

三かくの法

と呼ばれる、万能な「蓄財の鉄則」がよく引き合いに出される。

落語の「片棒」に出てくる本町二丁目の大商人・赤螺屋資兵衛がその代表格。余談だが、赤螺という貝は一度フタを閉じたら二度と開

けないので、極度のケチの喩えにつかわれる。この人は、「義理・人情・儀礼」の三つを徹底して欠いた結果、一代で相当な身上を拵えたのである(野村無名庵「落語通談」)。

もつとも、この「三かく」には別のバージョンもある。講談「大岡政談」のひとつ「安間小金次」の主人公・安間小金次は、流浪の果てに相模・金沢の豪農の入り婿となるが、先祖の因縁から火災に見舞われて焼死してしまふ。残された遺児・一平太は灰燼に帰した我が家を再興するため、極度のケチとして育つ。

彼は、「義理を欠き、恥をかき、事を欠く」という「三かくの法」を実行し、親類縁者や近隣のヒンシュクを買いながら、蓄財に励むのである。

何の仲でも 銭金は他人

「親子でも 銭金は他人」「夫婦でも 銭金は他人」などともいう。親子夫婦の間でも 銭金にはケジメをつけるのが常識であり、逆に、金銭が絡めば、肉親の間もたちまち他人同様、きわめて水臭いものになってしまう。

これは、落語「文七元結」(六代目圓生)の佐野植のお内儀のセリフに引用される。「自分の娘に礼などは言いにくい」などと洩る左官長兵衛へ、「身売りをして五十両という金を拵えてくれたんだから、面と向かってきちんと礼を言ったらどうだ」と、ケジメをつけさせるわけである。

●まいつ・たかし

一九六〇年愛知県生、月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に『半四郎の出世・十衛門の背後』(メタ・フレイム)、『人生に効く! 話芸のきまり文句』(平凡社新書)など。「話芸・きまり文句」辞典サイト <http://wagidom.com/logo-rifty.com/>

ラジオデイズ落語会 (毎月第2金曜)

【会場】石響 (四ツ谷) ※9月より会場変更になりました。
【時間】午後7時開演 (午後6時30分開場)
【木戸銭】2500円

●第5回 9月14日(金)

古今亭志ん五 二遊亭歌之介 五街道弥助

●第6回 10月12日(金)

三遊亭遊雀 古今亭菊之丞 入船亭遊一

※ご予約申込開始は各回前月1日から、ラジオデイズURL <http://radioj.jp>もしくは、予約受付専用電話〇三―三三―四一―三三〇より、先着順です。

オリンパスシンクする寄席 (毎月1回不定期)

【会場】お江戸日本橋亭
【時間】午後6時45分開演 (午後6時15分開場)
【木戸銭】2000円

●第5回 9月5日(木)

林家彦いち 三遊亭丈二

●第6回 10月27日(土)

古今亭寿輔 二遊亭白鳥

※ご予約は、オフィスMs〇三―三三―九九―三三二五まで



ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。飘逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみになる魅力的なコンテンツが満載です。9月より本番サイトがスタートします、乞うご期待!

文月の落語会ふたつ

第三回ラジオデイズ落語会 (七月一三日)

は、ゆるい話しぶりとその風貌から自由闊達な草書体のような笑いを呼び起こす瀧川鯉昇師匠と、一点一画を丹念に描く楷書のような淡みが利いた江戸前の語り口の入船亭扇辰師匠との古典対決。開口一番は立川志の吉さんで、落語界きってのイケメン。ネタはご存じほんわか「桃太郎」。

鯉昇師匠は「千早振る」。八五郎、業平の歌「千早振る」の意味をご隠居に尋きにくる。迷解説で無理な話を強引に運ぼうとするご隠居が面白い。続いて扇辰師匠が高座へ。名人左甚五郎もの「ねずみ」で勝負。つぶれそうな旅籠に泊まった甚五郎、ねずみの置物を彫って置いていく。かつて庶民に尊敬され名工と呼ばれた職人は、実に粋でカッコイイ。もう一席は珍しい「茄子娘」。バレ(エッチな)囁も師匠がやると下品にならない。

鯉昇師匠のトリネタは「船徳」、居候の若旦那がにわか船頭になる。口だけ達者だがいい加減、ナルシストで子供じみた若旦那は秀逸だ。立ったり座ったり船を漕いだりと高座上の熱演に客席は爆笑の渦に。古典も演者次第で新鮮な笑いになるのだ。

一方、第三回オリンパスシンクする寄席(七月四日)は、林家しん平師匠と春風亭栄助さんが登場! 栄助さんは、アメリカ帰りの国際派? 特異なキャラクターで二ツ目とは思えぬ実力の持ち主です。話し下手で不器用な奴こそが笑いを呼ぶネタになる「怪談はなしベタ」。もうひとつ「エントラのジョー」は、引退後のタレント転身を目論むあしたのジョーの最終戦。セコン

ド丹下段平の声がそっくりで笑わせる。強引に笑いに引き込む力強さは、東京では貴重です。しん平師匠は新作落語十八番「仮面ライダーのゆうづつ」から。憂鬱ではなく「ゆうづつ」。かつてヒーローだった仮面ライダーも、後輩に仕事を奪われ失業中。気持ちは昔と変わらないが、どうにも世の中と噛み合わない。中年に共通な憂鬱な気持ちを仮面ライダーが代弁する。トリネタは「鬼の面」。上方噺を題材に、古典落語のような珠玉の作品に育て上げた。子守奉公の少女、おかめの面に母親の面影を見出し涙する。「落語には少女を主人公にした噺がないので作った」と師匠、表現力の繊細さと弱い者に対する優しい眼差しが、この噺を後味のいい聴き応えのある作品に。若い頃、細身のリーゼントでブイブイ言わしていた師匠もいい感じの噺家になりました。(ラジオデイズ寺・和尚)



オリンパスシンクする寄席の"楽屋口(^o^)"

シンクする寄席オリジナルコンテンツ"楽屋口(^o^)"が携帯電話からお楽しみいただけます。



まずは、左の2次元バーコードを携帯のカメラで写してあらかじめ無料画像認識アプリ Sync ★R (シンクする) をダウンロードしてください。

QRコード、または <http://gwmj.jp> (オリンパスのシンク★R公式サイト) に空メールを送信すると、ダウンロード先URLが記載されたメールが返信されてきます。つぎに、Sync ★R (シンクする) アプリを起動して、各ページにあるマークを携帯のカメラで撮影して保存・送信すればOK。オリンパスシンクする寄席のチラシのマークでもラジオデイズのお楽しみコンテンツをお楽しみいただけます。※このとき、それぞれのマークの全体が入るように、ピントが合うところまで離して撮るのがスムーズにダウンロードするコツです。どうぞ、お試しあれ!

シンクする (Sync ★ R) とは?

オリンパス株式会社の開発による、先進の画像認識技術に応用したカメラ付き携帯電話用アプリのこと。新聞・雑誌などの紙面やテレビ画面上の画像を撮影するだけで、モバイルサイトへのアクセスを可能にします。

ラジオデイズの窓から

ガラス窓越しに新宿御苑の木々が、電話会社のビッグベンのようなビルが、うだる熱気に、ゆらゆら揺られて見えるのは、眩暈ゆえか益休みを目前に、ラジオデイズのコンテンツ制作も正念場。ぼんやりのんびりあんぐりり身上だったはずの我々が些か殺気だっているのもまた蕎麦つゆの山椒の如く小気味よく。9月14日には、この「声」をお届けできるのが楽しみ。8月27日より会員募集します!